

## トルコの旅



## 江藤 ヤエ子

五月下旬から九日間のツアーに参加した。甥の嫁・智恵子さんを誘う。私は二十九年ぶりのトルコだが、彼女は初めてなので喜んでいった。福岡空港から大韓航空機でソウル・仁川経由でイスタンブールに行く。十九時四十分着。空港近くのホテルに泊まる。

第二日目 ツアーの一行は二十三名。ご夫婦三組。男性一名。他は女性だった。添乗員は女性の村上さん。現地ガイドはアイハン氏でアイちゃんと呼ぶことになった。私はアイちゃんが女性なら、「いじわるお米に手を引かれ、愛ちゃんは、太郎の嫁になる」の流行歌

があつたことを思い出し、歌ったが、智恵子さんには通じなかった。古い歌で歌手ももういないからである。

バスでゲルボル港に行き、フェリーでダーダネルス海峡を渡りラブセキ港に着く。トロイ到着。伝統に基づいて復元された木馬を見た。巨大木馬である。兵士が中に隠れていたのだから、重かっただろうに、トロイ軍は、陣内に引き入れたので、負けたのである。知恵比べの戦いだったのだ。

エーゲ海近くのアイワルクに泊まる。売店でスカーフを求めた。結び方を五通り教えられたが、二通りしか覚えていない。

第三日目 小アジア最大の古代都市遺跡群エフェソスに行く。野外劇場ではコーラスで「夏の思い出」を歌った。全員の記念写真も写した。世界の七不思議の一つと言われているアルミテス神殿跡も見た。ギリシャ神話の



エフェソス遺跡（古代都市遺跡群）にて



エフェソス遺跡・アルミテス（ギリシャ神話の狩猟の女神）・  
コウノトリの子育て

狩猟の女神が祀られている。一本の高い柱が残っていて、コウノトリが子育てをしていた。

昼食後、革製品専門店に寄る。先ずは、ファッションショーがあつた。若い頃は、スクーターに乗っていたので、革のコートも着ていたが、指宿に住み、車の生活だから必要を感じないし、素敵な商品は一桁高くて手が出なかつた。

夕方、バムツカレに行く。トルコ有数の温泉地で、段々に連なる真っ白な石灰棚に溜まった温泉水の池が刻々と変化する空の色を映し、美しい奇観を楽しむことができた。私たちは靴を脱いで、足湯に浸かつた。靴を入れる袋を貰い、裸足で歩いた。監視員がいて、勝手に入ろうとした外人女性を大声で注意していた。

第四日目 八時発で、京都と姉妹都市のコンヤに向かう。途中の休憩所では、蜂蜜ヨー

グルトがあり、店員がコップを逆さにしても流れ落ちなかつた。

トイレ休憩所はキャラバンサライ(隊商宿)があつた。夕方、カッパドキアに着いた。

第五日目 朝三時半起床。気球ツアーに行く。代金二万円である。九名の参加だった。他の方は、高所恐怖症とのこと。私はこのOPが楽しみだったのだ。

集合場所で、軽い食事をした。バルーンにガスバーナーで空気を送る。係員の数名はバルーンの項上を持っていて、段々上になると、ロープを持っていた。寝ていたバルーンが実直ぐに立ち上がると、大きな籠の中は四つに分かれていて、一つに五名ずつ乗り込む。梯子が無いので、靴を入れる小さな穴が二カ所開けてあり、そこに靴を入れて、やつのこと中で中に入った。上がる時と下りる時には籠の中に足を曲げて低い姿勢になるのだった。



気球ツアー

私は智恵子さんの膝に乗せて貰い楽だった。

太古の昔、火山の噴火によって堆積した溶岩や火山灰が、長い年月の間に侵食されてきた奇岩群を上から眺め満足した。自分の乗ったバルーンは写せないので、傍を飛ぶバルーンを写した。

三十分くらいで下りると、テーブルが用意されていて乾杯をした。ノンアルコールは葡萄ジュース、酒飲みの方には、そのグラスにシャンペンを入れて配られた。バルーンに乗った証明書も貰った。ホテルに戻っても、朝食があった。

九時からギョレメ野外博物館に行く。古代ローマ時代にキリスト教徒が岩を掘って住み始め、約三十の洞窟教会が集まり、複合遺産として世界遺産に指定されている。

次に、トルコ絨毯店に行く。若い男性店員が、次々に絨毯を広げて見せる。少し買ひそ

うな振りをした人には、執拗に声をかけてきて、「恐くなった」と、逃げてきた女性もいた。

前に来た時には、家を新築したばかりだったので、玄関用の小さい絨毯を購入したが、もう先の短い暮らしでは何も必要とは感じなくなってきた。

カイマルク地下都市に行く。まるで蟻の巢のように地下へと延びる巨大地下都市である。地下八階の深さで、五千人以上の人が生活してきたと推定されている。中腰になって歩かないと、頭を上壁に打つ狭さだった。私も数回頭を打ったが、帽子を被っていたので痛くはなかった。

昼食後、四WDサファリをした。四名ずつ載って、鳩の谷、愛の谷、ラクダ岩、三人娘の岩などを見て回った。六台に分乗したが、私たちの運転者はハンサムで、助手席に乗って智恵子さんは、「運転手が面白い仕草をして

歌を歌い、楽しかった」と、笑顔だったが、後部席の私は、何も聞こえず、見えずで、ただ砂ほこりを被り揺れる車から落ちないように足を踏ん張っていたのだった。

宿舎は、壁も天井も岩を掘って造られていて、浴室には丸い浴槽があり、その奥にはシャワー室もあった。昔泊まった部屋は床に絨毯を敷いてあり、狭い所だった思い出があり、昔の俳のない場所が変わっていた。

第六日目 先ず、トルコ石専門店に行く。前に来た時にはブローチを求めたが、今回は目の保養をしただけだった。

それからアンカラに向かい、アタチュルク廟やアナトリアン文明博物館にも行った。室内は撮影禁止が多く、建物の外だけ、カメラで写しても、帰国すれば、何処が何処やらになつてしまう。

アンカラ空港からイスタンブールへ飛行機

で移動した。昔はバスで八時間かけての移動だったから体が楽になり助かる。旧市街にあるホテルに泊まる。

第七日目 ブルー・モスクに行く。礼拝の時間を知らせるための尖塔ミナレットが、世界で唯一、六木立つのが特徴。メッカ以外は通常四本でしか立てられないのだが、アフメット一世が、「黄金（アルトゥン）の」と、命じたのを、「六本（アルトゥン）」と聞き間違えたためにできたという逸話が残っている。頭にスカーフを被り中に入る。それから地下宮殿に行く。六世紀に造られた地下貯水施設。水の中には鯉が泳いでいた。

その後、グランド・バザールに移動。十五世紀より建設が始まった巨大バザールだ。迷路のような路地に五千の店がひしめき、金銀細工、宝石、絨毯、ガラスや革製品、陶磁器など伝統工芸品やお土産品を売っている。智

恵子さんは、ランプを求めていた。私は何も買わず、目の保養で歩いた。

休憩後、二十時からペリー・ダンスショーを見に行く。夕食を食べている時、ダンサーが来て、一緒に写真を撮っていたが、私たちが女性の所は素通りした。前に見た時には、ダンサーがテーブルの上を客の前まで来て踊り、客はお札を胸や腰に入れていた。日本人は誰も入れなかったので、ダンサーは怒り、二度と私たちのテーブルには来なかった。今回は舞台の上で踊り、客を引張りだしていた。

第八日目 今朝はゆっくりで十二時集合。ボスポラス海峡クルーズに行く。乗船してから昼食。鯖のサンドを食べた。アジアとヨーロッパを分ける南北三十一キロメートルの海峡で景色を眺めながら楽しんだ。別荘やベイレルベイ宮殿、乙女の塔などがあった。

下船後、エジプシヤン・バザールに行く。

し字型の市場で、日本人女性が嫁いでいる店もあつた。エジプトからの交易品、さまざまなスパイスや珍しい薬用品が並ぶ。インドを思い出す匂いがしていた。

夕方、トプカプ宮殿に入る。広大な敷地内は四つの庭園エリアに分かれ、それを囲む建物は、博物館になっていた。

夕食は日本食の予定だったが、トルコもデモをしていて、その店には行けず、中華料理に変更され、「鳳凰閣」で食べた。七品出た。案外あっさりした味だった。

十九時過ぎ、イスタンブール空港に着く。二十一時二十分発の機で韓国に向かう。

第九日目 十三時四十分、仁川空港着。乗り継ぎ五時間待ちである。体験コーナーがあつたので、「お面」作りをした。型を貫い、モデルを見ながら、色粘土を伸ばして貼り付ける。白と赤の粘土だが。型が黒なのでクロン

ボの面が出来た。智恵子さんは、「来年の節分の豆撒きに被ろうかしら」と言っていた。角は無いが、面白いと思つた。

仁川空港は設備が良く、二階には休憩室が沢山あり、足を伸ばして休むことが出来て助かつた。肩くらいまでの衝立があり、空いている場所を探して休む。

十八時三十五分発の機で、福岡着十九時五十五分。智恵子さんは、直ぐに熊本行きのバスがいたので別れる。

私の乗るバスは二十三時五十五分発で、九州中でも最終バスだった。(エッセイスト)

